

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepps/>

第169号 会 報 2000年 8月 1日

目 次

第107回総会報告.....	1	第108回総会並びに講演会開催のお知らせ.....	16
第107回総会式次第.....	1	講演申し込みについて.....	17
会長挨拶.....	2	講演申し込み用紙.....	18
長谷川・永田賞審査報告.....	3	予稿原稿フォーマット.....	19
第206・207回運営委員会報告.....	4	田中館賞の推薦について.....	21
EPS運営委員会報告.....	6	平成12年度大林奨励賞候補推薦のお願い.....	21
平成11年度決算・平成12年度予算書.....	8	人事公募・助成等.....	21
長谷川・永田賞を受賞して.....	11	SGEPSS Calendar.....	24
分科会報告.....	13		

第107回総会報告

第107回総会は、2000年6月25日（日）から28日（水）まで国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて行われた地球惑星科学関連合同大会の3日目、16時～18時に開催された。まず湯本会員による開会の辞の後、松本会長の提案により麻生運営委員が議長に指名された。松本会長の挨拶に続き、長谷川・永田賞第23号と24号が、それぞれ西田篤弘会員と大家寛会員に授与された。続いて大村運営委員より第206回および207回運営委員会の報告、小野運営委員よりEPS運営委員会報告がなされた。次に山崎運営委員より平成11年度決算・平成12年度予算案が示され賛成多数で承認された。この時、定足数227に対して、出席数260（委任状165）であった。次期開催地である極地研究所の佐藤夏雄委員より、第108回総会は板橋区の援助を得て開催される旨の報告がなされた。綱川運営委員より地球惑星科学関連学会連絡会で議論されてきた2001年合同大会の経緯と、東大に開設

予定の合同大会運営機構の説明がなされ、質疑応答の後、2001年合同大会を共催し、運営機構にも実行委員を出すという運営委員会提案が賛成多数で承認された。

（大村 善治運営委員）

第107回総会式次第

・開会の辞	湯元会員
・議長指名	松本会長
・会長挨拶	松本会長
・長谷川・永田賞授与	松本会長
・第206・207回運営委員会報告	大村運営委員
・EPS運営委員会報告	小野運営委員
・平成11年度決算・平成12年度予算	山崎運営委員
・次期開催地	佐藤会員
・2001年合同大会について	綱川運営委員
・閉会の辞	麻生運営委員（議長）



第108回総会並びに講演会（本年11月20～23日、板橋で開催）のお知らせが、16～20ページにあります。

第107回 地球電磁気・地球惑星圏学会総会 会長挨拶

会長 松本 紘

本日の総会に多数の会員のご出席をいただきありがとうございます。

皆さんご承知のように、学会を取り巻く諸般の情勢は学術の進歩というだけでなく、学術界、官界、行政改革など人間関係、社会変革と関係して、めまぐるしく変動しています。今回は、会長挨拶でその中の二、三の点を取り上げご報告と私見を申し上げます。

まず、うれしいニュースです。先日の日本学術会議会員の選挙におきまして、当学会の元会長、西田篤弘会員が学術会議会員として選ばれました。従来、地球物理分野の各学会を代表する推薦人が選挙する方式では、永田先生も当選がかなわなかったほど、わが学会は不利な体制にあったわけですが、高い知名度と学術のみならず学術行政・管理において卓抜した能力を発揮されてこられました西田会員こそ、この変革期に分野を超えて地球物理学および学術界全体の発展になくてはならない人材であることを推薦人会議で主張いたしましたところ、理解が得られまして堂々の一位の成績で当選されました。誠に喜ばしく思います。西田先生、まことにおめでとうございませう。同時によろしくお願ひ申し上げます。（全員拍手）

学術会議のもう一つの重要な観点は、他の学会でも指摘されておりますが、研究連絡委員会とその基盤学会との関係であります。我々の学会からは地球電磁気学研究連絡委員会、宇宙空間研究連絡委員会、SCOSTEP専門委員会、惑星科学研究連絡委員会に委員を送り込んでいます。研究連絡委員会は学術情報の交換に留まらず、科学研究補助金の審査員の決定や学術研究のプロジェクト推進などに関し、研究者にとって非常に重要な役割を担ってきました。その意味で、同封されております研究連絡委員候補の選挙用紙は会員各位にとって大変重要なものです。よろしく投票をお願い申し上げます。

科学研究費補助金につき、科学研究費補助金の総額は確実に増えているにもかかわらず、近年「当たり」が悪いとの噂が聞こえてまいります。確かに新規採用される確率は低くなっていますが、採用された研究に関しては金額も大型化され、研究期間も伸びている傾向ですから、単純に当たりが悪いとは言えないかもしれません。しかし、我々の研究領域と研究対象が広がるにつれ、審査員が公平採点を心がけないと分野間、機関間に不公平感が広がり、申請件数が減少し、申請件数に比例して当該分野に割り



当てる補助金の枠が決定される現在のシステムの下ではデフレスパイラルの様相を示しかねません。科学研究費補助金がどのように分配されたか、審査員はどうであったかなどの情報は開示されるようになってきていますが、一体会員がどのくらい、どの分野に、どの種類の科研費に申請をしていて、どれくらい落ちているかなどについては情報がありません。やはり、申請件数を増やし、科学研究費をわが学会の研究活動に生かすためにもこういった統計情報は役立つものと思われます。そこで会員諸氏のご協力を得て、過去数年間の申請状況、受領状況などを調査してみようかと考えております。統計結果については何らかの形で会員諸氏にお知らせしたいと思ひます。

次に、学会のあり方に関し、最近の合同大会、学会連合などの議論を通じ会員諸氏の意識は高まりつつあります。言うまでもなく、学会活動は学術成果の発表と議論を通し、それぞれの研究者が切磋琢磨し、その結果学術の発展を図ろうとするものであります。学会はそのために二つの場を提供しています。講演会と学術誌であります。わがSGEPSSは合同大会が始まる前は春秋二回の講演会を、合同大会が始まってからは、春の合同大会とSGEPSS総会、秋の学会講演会・総会を続けてまいりました。

学術誌に関しては、JGG誌からEPS誌へと大

大きく発展し、その足場を固めつつあります。別項で、EPS誌の最近の状況について詳しく述べられています。ただ、学術誌は国際競争が厳しく、米国のJGR誌に続き、JASTP誌もアジアに（実質は日本に）あらたに編集局を置こうとしています。EPS誌の財政的基盤は文部省の出版助成金を4年間頂くこととなり安定化いたしました。が、販路、購読者の拡大、特に海外購読者数の拡大は重要な課題となっております。本誌編集委員長とEPS誌運営委員会の活動を支えることが肝要と考えます。（個人的にはEPS運営委員会に出版社とは独立の長任期の事務局長を置くのがよいと思っています。）

学会がどの方向へ向かうのがよいかということは大変重要な問題です。地球物理学全体、あるいは更に大きな地球科学もしくは地球惑星科学を覆う大連合学会が模索されてきましたが、学会長等懇談会で表明された各学会の意思によれば、現段階ではほとんどの関連各学会は合同大会の共催などの「緩やかな連合」を望んでいるようです。わがSGEPSSには地球物理学以外に、宇宙科学、電子通信工学などと密接な関係を保ちつつ研究を進めている会員も少なからず存在します。したがって、SGEPSSの先輩たちが築きあげてこられた実績は、IUGGだけにとどまらず、URSIやCOSPAR、SCOSTEPなど広範囲な分野における国際

的活躍となって開花しています。どれかの連合に画一的に参加を決定することは、SGEPSSのさらなる発展にとって今、とるべき道かどうかは議論の余地が十分に残されています。開拓精神を大切に、まずSGEPSSの足元を固め、その上関係する多方面の緩やかな連合に参画するというのが肝要ではないかと個人的には考えています。重要なことは会員相互の「利」を求める際、「害」を最小限に留めなければならないということではないでしょうか。

その意味で、分科会活動を通じてSGEPSSのアウトリーチを試みるということが始まっています。私の呼びかけに応じて、すでに下記の分科会活動が開始され、SGEPSS会員の学際領域での活躍が期待できると同時に、SGEPSSへの関心を持ってもらえる研究者を増やし、もって会員勧誘につながれば幸いです。

- CA研究分科会
- グローバル地磁気観測研究分科会
- プラズマ粒子シミュレーション研究分科会
- アラスカ・ロケット研究分科会
- 宇宙天気研究分科会
- 宇宙飛翔体環境研究分科会
- 波動研究分科会

長谷川・永田賞審査報告

第23号 受賞者名 西田 篤弘 会員

西田篤弘会員は磁気圏物理学の揺籃期から今日に至るまで、宇宙空間でのプラズマ物理現象の解明において数多くの業績をあげてこられました。標準理論となったプラズマ圏形成理論の提唱をはじめとして斬新な概念を含んだ数多くの研究の中で、特に太陽風と相互作用する磁気圏尾部の構造やダイナミクスの研究においては、基本要素としての磁気リコネクション過程の存在を実証し、リコネクションに基づく磁気圏モデルの確立に中心的役割を果たされてきました。更にジオテイル衛星計画では国際的リーダーシップを発揮され、国内外の研究発展に多大な貢献をされました。また学術行政においても、文部省学術国際科学官、学術審議会委員、測地学審議会委員、学術会議地球電磁気研究連絡委員および宇宙空間研究連絡委員会委員長など学術の振興に努められました。また本学会の運営委員、評議員、第十六

期会長を歴任され学界の発展に寄与されるとともに学会運営の充実向上にもご尽力され、多くの後進の育成にも努めて来られました。

ここに本学会は、地球電磁気・地球惑星圏科学に対する西田篤弘会員の功績と功労をたたえ、長谷川・永田賞を贈呈します。

第24号 受賞者名 大家 寛 会員

大家寛会員は長年にわたって、宇宙空間物理学分野における理論と実験・観測の両面からの研究に数々の業績をあげてこられました。特にインピーダンスプローブの開発に始まる、飛翔体観測装置や科学衛星EXOS-B、-C、-D等の開発を通じた大家寛会員の多大な功績により、我が国の宇宙観測のレベルは国際的に高く評価されるに至りました。また、新たな太陽惑星系形成論の提唱や惑星探査計画の推進並びに重点領域研究「原始太陽系と惑星の

起源」の代表者としての実施により、惑星科学という新しい学問分野を我が国に拓かれました。さらに、デカメータ電波観測による木星磁気圏の研究などを通じ、二十一世紀に向けての学界の歩みに新たな展望を拓かれることとなりました。国際的にはSTEPをはじめとする国際協同研究計画推進に終始リーダーシップを発揮され、この分野の研究の発展

に多大な国際貢献をされたほか、本学会においては運営委員、評議員、第十七期会長を歴任されて、学界の発展に献身的なご尽力をされました。

ここに本学会は、地球電磁気・地球惑星圏科学に対する大家寛会員の功績と功労をたたえ、長谷川・永田賞を贈呈します。

(松本 紘会長)

第206・207回運営委員会議事録

第206回運営委員会
(評議員・運営委員合同会議) 議事録

[日時] 2000年6月1日(木) 14:00~18:00

[場所] 国立極地研究所 第一会議室(2F)

[出席] 会長 松本紘

評議員 荒木 徹、江尻全機、大家 寛、

國分 征、本蔵義守

運営委員 麻生武彦、岩上直幹、井口博夫、

歌田久司、大村善治、小野高幸、品川裕之、

田中良和、津田敏隆、綱川秀夫、早川基、

星野真弘、山崎俊嗣

運営委員補佐 笹井洋一、湯元清文、

横山由紀子

[欠席] 評議員 上出洋介、河野 長、

鶴田浩一郎、西田篤弘、福西 浩

運営委員 家森俊彦

2001年合同大会への参加形態について、お互いに意見を交換し慎重に検討した結果、以下の方針を決定し、総会に諮ることとした。

(1) 2001年の合同大会は、共催学会としてセッション参加する。

(2) 赤字が出た場合に応分の負担をしなければならないことから、SGEPSSから合同大会運営機構のメンバーとして必要な数の実行委員を推薦し、合同大会の運営に積極的に参加してゆくことで、参加費の高騰を抑えると同時に赤字を出さない努力をする。2002年以降の参加形態については、今後の経緯を見て再検討する。

(3) これらのSGEPSSの方針を関連学会に周知して理解を求めるために、2001年合同大会の連絡会有志提案の運営方法について、大幅な業者委託と、参加費の値上げによる参加者の減少により、赤字が出る可能性を危惧し、その対案についても十分な検討が

なされてきたこれまでの経緯と2001年以降の合同大会への参加方針を各学会長へ文書で通知する。

第207回運営委員会議事録

[日時] 2000年6月25日(日) 19:00~22:00

[場所] 国立オリンピック記念青少年総合センター C104号室

[出席] 会長 松本 紘

運営委員 麻生武彦、家森 俊彦、井口博夫、

岩上直幹、歌田久司、大村善治、小野高幸、

品川裕之、田中良和、綱川秀夫、早川基、

星野真弘、山崎俊嗣

運営委員補佐 笹井洋一、湯元清文、

横山由紀子

[欠席] 運営委員 津田敏隆

議題および検討結果

1. 前回議事録の確認
原案のまま承認した。

2. 会計報告

海外会員の会費を確認し見直す。海外への学会の説明文を用意することを検討する。

3. EPS[誌]運営委員会報告

科研費出版助成金を平成12年度より4年間の内定を得て、財政的に安定した基盤が得られた。但し国内・海外の購読者数が伸び悩んでおり、購読者数の確保が急務であること、EPSの運営に対して年間100万円程度を必要としていることから、平成13年~15年の参加学会の分担を以下のようにすることとした。

1. SGEPSSは会員分の雑誌を買い取る。
2. 地震学会は年間50万円の補助金と、300部の雑

誌を買い取りを負担する。

3. 火山学会と測地学会は年間25万円の補助を行う。EPS規約に基づき、EPS誌編集委員長の任期満了に伴う改選を行う。再任が望ましいと判断されるが編集委員長選考委員会の構成を参加学会に依頼して信任問う予定である。EPS誌の配布に関して、地震学会よりSGEPSS運営委員会に会員重複を調べるためにSGEPSS会員名簿閲覧の依頼があり、使用目的を限定した上で地震学会と名簿の交換を行った。

4. 新入会員・退会者の承認

SGEPSS新入会員及び退会者リスト

新入会員

<正会員> 林 信哉 (佐賀大学)
<学生> 福田 毅哉 (茨城大学)
吉村 令慧 (京都大学)
村田 洋三 (総合研究大学院大学)
佐藤 謙 (神戸大学)
梅田 隆行 (京都大学)
加藤 雄人 (東北大学)

退会者

<正会員> 川本 洋人 (東京理科大学) 逝去退会
趙 永浄 (名古屋大学)
室井 勲
一之瀬 匡興 (信州大学)
中村 直文 (大日本コンサルタント)
<学生> 竹内 徹 (名古屋大学)
李 宏建 (千葉大学)
森瀬 和宏 (名古屋大学)
片岡 弘匡 (名古屋大学)

5. シンポジウム・国際会議の共催・協賛

- ・2001年アジア・太平洋電波科学会議 (A P - RASC'01) (平成13年8月開催予定) 協賛
- ・第25回電離気体現象国際会議 (平成13年7月開催予定) 協賛
- ・インターアカデミーパネル2000年会議及び第8回アジア学術会議 (平成12年5月開催) 後援
- ・第2回大気・環境・宇宙リモートセンシングに関するS P I E 国際アジア太平洋シンポジウム (平成12年10月開催予定) 協賛
- ・第44回宇宙科学技術連合講演会 (平成12年10月開催予定) 共催
- ・プラズマ科学シンポジウム2001 / 第18回プラズマプロセス研究会 (平成13年1月開催予定) 共催

6. 第18期日本学術会議研究連絡委員会の選挙につ

いて

地球電磁気研究連絡委員会 (8名)
SCOSTEP専門委員会 (3名)
惑星科学専門委員会 (1名)

宇宙空間研究連絡委員会 (3名) の候補者を12名連記で8月14日(月)を期限として投票を行う。無効票を減らすために、委員候補資格がない人の名前を投票依頼書に明記する。総会および電子メールで自己申告を求める。

7. 分科会活動について

CA研究会、グローバル地磁気観測研究会、アラスカロケット研究会、宇宙飛行体環境研究会、プラズマ粒子シミュレーション研究会、宇宙天気研究会、波動研究会より活動報告があった。

8. 研究助成・賞案内

・第17回 (平成12年度) 井上学術賞 (井上科学振興財団)

推薦件数: 本学会より1件

締切期日: 平成12年9月20日(水) 必着 (総務〆切は8月31日)

・第41回 (平成12年度) 東レ科学技術賞 (東レ科学振興会)

推薦件数: 本学会より2件以内

締切期日: 平成12年10月10日(火) 必着 (総務〆切は9月11日)

・第41回 (平成12年度) 東レ科学技術研究助成

推薦件数: 本学会より2件以内

締切期日: 平成12年10月10日(火) 必着 (総務〆切は9月11日)

・田中館賞の推薦

今年度の田中館賞の推薦締め切りは、平成12年9月30日(土)とする。

9. 2001年合同大会について

6月1日の合同会議の決定に従い、各学会長にSGEPSSの方針を通知した。運営機構には、SGEPSSから綱川、小野、大村運営委員、東大事務局として浜野洋三会員、岩上運営委員、中村正人会員、北大・九大LOCとして渡部重十会員、湯元清文会員が参加する。会期を5日(2001年6月4日~8日)とする予定。参加費は、事前登録で学生6000円、一般9000円、書類(CD-ROM販売)12000円、当日参加は一律12000円の予定。

10. 第107回総会式次第

議長を麻生運営委員に依頼する。会計報告は山崎

運営委員、EPS誌運営委員会報告は小野運営委員、2001年合同大会については綱川運営委員がこれまでの経緯と合同大会運営機構の準備状況を説明する。

11. その他

次回運営委員会は、9月に行う。

(大村 善治運営委員)

EPS運営委員会報告

"Earth, Planets and Space" (EPS)に関する報告
2000年6月23日 EPS運営委員会

1. EPSの発行状況

"Earth, Planets and Space" (EPS) は、"Journal of Geomagnetism and Geoelectricity" (JGG) および "Journal of Physics of the Earth" (JPE) を引き継ぐとともに、さらに内容を充実させた地球惑星科学の総合欧文ジャーナルとして、1998年1月に創刊された。Vol. 50 (1998年) についてはNos. 1-12 (論文117編、総ページ数1065余)、Vol. 51 (1999年) についてはNos. 1-12 (論文数128編、総ページ数1329余)、Vol. 52 (2000年) についてはNo. 5まで順調に発行されている。投稿状況も順調であり、Regular Issueへの投稿について見ると、創刊当初月平均7編程度であったものが、最近1年間では平均月10編を超えるようになってきた。Regular IssueのみでもEPS出版が維持可能な条件が整いつつある。また次第に多様な分野の論文が投稿されるようになってきている。特集号についても意欲的な企画が多く申し込まれている。Research News (大型プロジェクトの紹介など) として、GPS、Superplume Project が掲載された。

2. EPSの購読状況

国内購読者数については、創刊時にJGG、JPEからひきついで購読者を維持しているほか、EPS発刊後の新規購読者がいるが、一方で定年等々による購読中止者もあり、ほぼ現状維持の状態である。ただしオンライン化によるテキスト公開後、わずかであるが購読者数が減少する傾向が見られる。今後、とくにSGEPSS 以外の関係学会会員のより一層の購読努力が求められる。海外購読者数についても現時点ではJGG、JPEから引き継いだ購読者を維持した状態に留まっている。EPS運営委員会では、各学会からリストアップされた海外研究者にEPSを送付するなどして、海外

購読者数の確保・増加に向けて努力している。

3. 文部省からの科研費補助金の動向

1999年度に、文部省科研費補助金の研究成果公開促進費のカテゴリーとして「特定欧文総合誌」(複数の学会が共同で発行する欧文総合誌) が新設され、EPSは新カテゴリーへの申請が認められた。2000年度には、さらに複数年の申請が可能になり、EPSに対して、今後4年間にわたり毎年2500万円~2900万円の補助金が内定した。これにより、財政的にかなり安定した状態でEPSを発行することが可能になった。

4. EPS電子出版化等のサービスの充実

4-1. EPSの電子出版化

EPS運営委員会・編集委員会では、文部省からの科研費補助金の増額が実現したことをきっかけに、EPSの電子化を進めることを決め、1999年末から順次、Vol. 50、51のフルテキストまで含めたフリーでの公開を実施しており、現在 Vol. 52 (2000年) までフリーでの公開を決定している。それ以降については、購読者数を確保する必要もあり、課金制への移行について検討中である。

投稿に関してもPDF文書ファイルによるものも受け付けることとした。査読についても、査読者が対応可能であれば、PDFファイルにて査読をおこなうことも検討中である。

4-2. その他のサービスの充実

(1) 別刷りを購入する著者には、印刷原稿ができあがった段階でPDFファイルを送付し、共著者への配布や著者のホームページへの添付がおこなえるようにする。

(2) 1999年5月に、カラーページチャージを1ページ当たり12万円から4万5千円へと値下げすることを決定し、当面この価格を維持することとしている。なお、カラーの別刷り代金は白黒と同様である。

(3) 電子出版にはカラー図版を使用するが、印刷出版には同じ図面を白黒化したものを使用することも可能とする。これにより、著者のカラー図版使用にかかる費用を大幅に軽減することが可能になる。

5. EPSの購読拡大のための宣伝等

5-1. 海外購読のうち機関購読の伸びがほとんど期待できない状況を踏まえ、EPS運営委員会としては個人購読者の獲得により力を入れることにした。この間、各学会からリストアップされた海外研究者のうち200人にEPSを送付するなどして、海外購読者数の確保・増加に向けて努力している。

5-2. 上記に挙げたようなEPSのメリットを宣伝するため、EOSに大型の広告を出すことにしており、準備中である。

6. EPS運営委員会の会計報告

1999年度(1999年4月1日～2000年3月31日)EPS運営委員会の会計報告は以下のとおりである。

1999年3月31日	繰り越し金		2,145,713円
5月17日	編集委員会旅費	149,500円	
9月10日	編集用通信費	68,550円	
	振り込み手数料	472円	
	利息	727円	
2000年3月31日	地震学会より振込	1,000,000円	
2000年3月31日	繰り越し金		2,927,918円

3学会からのこれまで振り込み (4月～3月の年度として)

	1997年度	1998年度	1999年度	(万円)
地震	0	100	100	
火山	50	50	0	
測地	50	10	0	

地震、火山、測地学会とも、2000年度中には、それぞれ100万円、50万円、90万円を振り込む予定にしている。この間おこなった海外研究者へのEPSの送付・購読宣伝のための経費として、今年度は45万円の支出が見込まれている。この事業は来年度以降も継続しておこなう予定である。

7. 2001年からのEPSの編集・発行・運営について

2001年(Vol.53)以降のEPSの編集・発行・運営について、下記のように出版社との契約、編集委員会・運営委員会内規、学会間申し合せ事項を改定する。

(1) 出版社との契約

2001年(Vol.53)より3カ年の契約とする。EPSの年間総ページ数を1300ページに増やす。覚え書きとして、カラーページチャージを4万5千円/ページ(450ドル/ページ)と変更する。契約書には現れないが、引き続き電子化を進めるとともに、著者へのPDFファイル送付などのサービスを継続してもらう。

(2) 編集委員会・運営委員会内規

任期途中で編集委員の交代の規定を追加する。

(3) 学会間申し合せ事項

今後4年間、文部省からの科研費補助金の見通しが立ったことをふまえ、学会からの補助金の扱いについては次のような方針で望みたい。運営委員会が現在管理している学会からの補助金は、緊急時の支出(総ページ数が急増した場合など)にそなえて保持する。運営委員会として定常的に必要になる経費は、海外購読者確保のためのEPSの宣伝経費と編集委員・運営委員への旅費等であり、年間100万円程度である。これをふまえ、下記のように学会間申し合せ事項を改定する。

「Earth, Planets and Space」誌・学会間覚え書き

EPS誌の発行等に関する補助等について、以下のごとく取り決める。

1. 文部省研究成果助成金の申請は地球電磁気・地球惑星圏学会が代表して行う。
2. 地球電磁気・地球惑星圏学会は、学会会員分の雑誌を買い取る。
3. 日本地震学会は、年間50万円の補助を行い、300部の雑誌を買い取る。
4. 日本火山学会は、年間25万円の補助を行う。
5. 日本測地学会は、年間25万円の補助を行う。
6. 本覚書は平成13年度～15年度までの3年間継続し、その後については平成15年度に調整する。

(小野 高幸運運営委員)

平成11年度決算・平成12年度予算書

第107回総会において、平成11年度決算・平成12年度予算および学会基金と特別会計の平成11年度の決算が、承認されましたので以下の通りご報告いたします。

(会計担当運営委員)

平成11年度特別会計決算

平成11年4月1日～平成12年3月31日

<長谷川・永田賞>

(平成11年4月1日～平成12年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	594,851	賞牌費	0
利子収入	201	次期繰越金	595,052
計	595,052	計	595,052

<田中館賞>

(平成11年4月1日～平成12年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	732,613	賞牌代	82,162
利子収入	607	雑費	7,654
		次期繰越金	643,404
計	733,220	計	733,220

<大林奨励賞>

(平成11年4月1日～平成12年3月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰越金	606,406	賞牌費	17,017
利子収入	240	雑費	4,410
		次期繰越金	585,219
計	606,646	計	606,646

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成11年度本会計決算書

平成11年4月1日－平成12年3月31日

収入の部				
科目	11年予算額	11年決算額	差異	備考
会費収入	8,840,000	8,814,488	25,512	
正会員会費	7,050,000	7,178,000	△ 128,000	96%/年度末総数 622名 (過年度分含む)
学生会員会費	420,000	480,000	△ 60,000	125%/年度末総数 64名 (過年度分含む)
海外会員会費	170,000	206,488	△ 36,488	年度末総数 44名
賛助会員会費	1,200,000	950,000	250,000	90%/年度末総数14社/21口 (納入件数12社計19口)
出版助成金	31,100,000	31,110,000	△ 10,000	平成11年度科学研究費補助金
予稿集売上代	650,000	714,500	△ 64,500	第106回総会・講演会予稿集売上等
大会参加費	410,000	363,000	47,000	第106回総会・講演会参加費
利子収入	60,000	43,681	16,319	
雑収入	100,000	334,797	△ 234,797	英文許諾抄録料, 学情への講演要旨登録
小計	41,160,000	41,380,466	△ 220,466	
前期繰越金	1,545,825	1,545,825	0	
合計	42,705,825	42,926,291	△ 220,466	
支出の部				
科目	11年予算額	11年決算額	差異	備考
管理費	2,240,000	2,296,962	△ 56,962	
業務委託費	1,900,000	1,949,844	△ 49,844	(財) 日本学会事務センター事務委託費
通信費	160,000	197,619	△ 37,619	
印刷費	100,000	104,844	△ 4,844	第18期会員候補者等選挙書類
旅費	50,000	8,450	41,550	
雑費	30,000	36,205	△ 6,205	銀行振込手数料等
事業費	37,271,000	36,941,225	329,775	
会誌分担金	34,431,000	34,505,700	△ 74,700	分担金 3,395,700円+助成金 31,110,000円
会報印刷費	200,000	261,345	△ 61,345	No.164-167印刷費
会報発送費	600,000	482,330	117,670	No.164-167発送費
大会開催費	1,000,000	860,550	139,450	第106回総会・講演会
予稿集印刷代	780,000	825,300	△ 45,300	"
広報活動費	30,000	6,000	24,000	第106回総会・講演会の広報活動費
名簿作成費	0	0	0	
その他	230,000	0	230,000	
基金交流事業費	600,000	400,000	200,000	国際学術集会出席補助金2名、招致補助金1名
基金繰入金	400,000	400,000	0	
予備費	100,000	0	100,000	
小計	40,611,000	40,038,187	572,813	
次期繰越金	2,094,825	2,888,104	△ 793,279	
合計	42,705,825	42,926,291	△ 220,466	

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成12年度本会計予算書

平成12年4月1日－平成13年3月31日

収入の部				
科目	12年予算額	11年予算額	11年決算額	備考
会費収入	8,614,000	8,840,000	8,814,488	
正会員会費	7,080,000	7,050,000	7,178,000	590名×12,000円
学生会員会費	360,000	420,000	480,000	60名×6,000円
海外会員会費	150,000	170,000	206,488	
シニア会員会費	24,000	-	-	8名×3,000円
賛助会員会費	1,000,000	1,200,000	950,000	
出版助成金	25,200,000	31,100,000	31,110,000	平成12年度学術振興会科学研究費補助金
予稿集売上代	650,000	650,000	714,500	第108回総会・講演会
大会参加費	400,000	410,000	363,000	"
利子収入	50,000	60,000	43,681	
雑収入	250,000	100,000	334,797	
小計	35,164,000	41,160,000	41,380,466	
前期繰越金	2,888,104	1,545,825	1,545,825	
合計	38,052,104	42,705,825	42,926,291	
支出の部				
科目	12年予算額	11年予算額	11年決算額	備考
管理費	2,330,000	2,240,000	2,296,962	
業務委託費	1,900,000	1,900,000	1,949,844	(財)日本学会事務センター事務委託費
通信費	200,000	160,000	197,619	
印刷費	150,000	100,000	104,844	第18期研連委員選挙・役員選挙書類印刷費
旅費	50,000	50,000	8,450	
雑費	30,000	30,000	36,205	
事業費	32,575,700	37,271,000	36,941,225	
会誌分担金	28,595,700	34,431,000	34,505,700	分担金3,395,700円＋出版助成金25,200,000円
会報印刷費	250,000	200,000	261,345	
会報発送費	600,000	600,000	482,330	会員名簿同封発送費含
大会開催費	1,000,000	1,000,000	860,550	第108回総会・講演会
予稿集印刷代	900,000	780,000	825,300	"
広報活動費	30,000	30,000	6,000	
名簿作成費	700,000	0	0	
その他	500,000	230,000	0	IUGG援助金平成11,12年度分等
基金交流事業費	600,000	600,000	400,000	
基金繰入金	400,000	400,000	400,000	
予備費	100,000	100,000	0	
小計	36,005,700	40,611,000	40,038,187	
次期繰越金	2,046,404	2,094,825	2,888,104	
合計	38,052,104	42,705,825	42,926,291	

長谷川・永田賞を受賞して

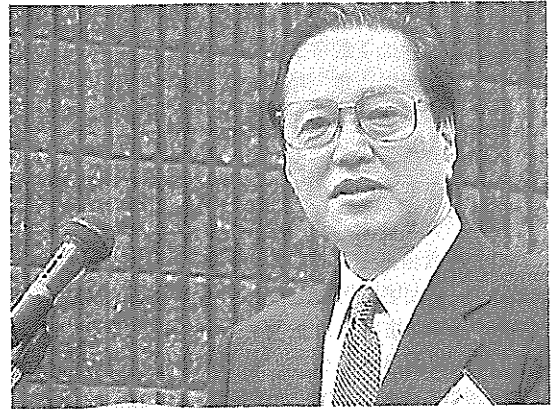
西田 篤弘

長谷川・永田賞を授与して頂き、まことに光栄に存じます。永田武先生は私の恩師の一人であり、さまざまな点で大きな影響を与えてくださいました。受賞にあたって永田先生について個人的な思い出と感謝の言葉を記させていただきます。

永田武先生のお名前を知ったのは12歳の時でした。先生が1948年に出版なさった「生きている地球—地震と津波」と「—火山の噴火の話」という子供向けの解説書を偶然に本屋で見つけ、その面白さに魅了されました。どちらも火山や地震という自然現象のメカニズムを解き明かそうという情熱が生き生きと感じられる名著で、今読み返してみても引きつけられます。その時の興奮が忘れられず大学では地球物理学科に進学したのですが、当時はプレートテクトニクスに代表される新しい考えが台頭する以前でしたから、地球物理の講義のほとんどは数理物理の流れを汲む19世紀的なものでした。その中でまだ40代前半だった永田先生がひとり気をはいておられたのが魅力的であり、また1957年にスプートニクが打ち上げられて宇宙空間研究の新しい道が開けると感じたことが相俟って、大学院は永田研究室にお世話になることにしました。

永田研究室ではDungeyのCosmic Electrodynamicsを輪講していました。当時、永田先生は南極観測隊の隊長という重い役目を持っておられながら、この輪講には欠かさず出席し熱心に勉強しておられました。地球科学が宇宙空間へ発展しようとする趨勢をご覧になり、研究室として宇宙空間プラズマの理解の水準を高めておかなければならない、とお考えになっていたのだと想像します。この本で基礎的な概念を学んでいたのは大変役に立ち、そのせいか後年Dungey先生と私が同じアイデアでほぼ同時に論文を発表したことが2度あります。

永田研に入ってから1年少したったときに突然教授室に呼ばれました。それまで教授室に入ったことはなく、先生と差し向かいで話したこともありませんでしたから、何かと緊張しましたが、博士過程をUBCのJacobs教授のところではやらないかという有難いご提案でした。喜んでお受けしましたが、カナダに出発する迄の約1年の間に私に実力も能力も不足していることがだんだんばれてしまいました。そこでセミナーで毎週話をするようにと云われました。特訓を受けたわけです。毎回、先生のお叱りを受けてしんどい思いをしましたが、私がなんとかこ



こまでやって来られたのは、あの時の訓練によってプロの科学者の厳しさというものを叩き込んでいただいたお陰だと深く感謝しています。

永田先生のニックネームは「たいしょう」でした。誰がつけたのか知りませんが、このニックネームは「名は体をあらわす」類の優れた命名でした。先生のご性格には餓鬼大将そのもののところがあって、閉口したことも度々あります。しかし先生の何よりの魅力はやはり餓鬼大将ならではのもので、それは世界で一番になってやろうという気概でした。30代の半ばに英語の教科書Rock Magnetismを著されたのもその現れだと思います。1953年当時に業績を英文でまとめて世界に問おうとするような日本の研究者は他にはほとんどいなかったのではないのでしょうか。国際地球観測年の中核的な事業であった南極観測で日本隊の隊長という重い任務をお引き受けになったのも、そのような気迫と使命感がもたらしたものであったと思います。

永田先生のもう一つのご功績は、前田憲一先生と手を携えて日本の地球電磁気・超高層大気の研究をとりまとめ、緊密で強固な集団をお作りになったことです。われわれの世代も両先生が築かれたこの遺産の恩恵にあずかっており、私個人の場合は宇宙科学研究所という組織で研究を行い、多くの大学の研究者の方々と一緒にジオテイル衛星計画を実行することができたのもそのおかげです。

たいしょう猛語録の中に、「日本の地球物理は私の目の黒いうちは二流ですが、私がいなくなったら三流になります」というのがあります。私はこのご期待に添わないようにと心がけて来た次第ですが、「そんなことは君に言われなくてもわかってま

すよ」というお得意の台詞が聞こえるような気がします。

(写真 AGUでのVan Allen Lecture、2000年6月1日、ワシントンにて)

長谷川・永田賞を受賞して

福井工業大学（東北大学名誉教授） 大家 寛

私が最も大切に思い、そして生涯にわたる研究の全般に亘りさまざまな支援を受けてきたこの地球電磁気・地球惑星圏学会からこの度受賞にあずかりました長谷川・永田賞は、私の学問の歩みとしても一つの総集編という意味もあり、よろこびをもっていただきました。実はこの喜びは、学問の領域だけに閉じたものでなく、学会活動に総合的にかかわり、学会の歴史とともに歩ませていただいたということとも無関係ではありません。まず、初心の若手研究者であった10年間、つづいて運営委員会メンバーとして学会の運営活動の礎の部分で働かせていただいた頃の15年間、そして学会評議員、学会長として学会の歩みの方向を求めて大きな責任を感じて歩いたその後のおよそ15年間、そのそれぞれの歩みがこの受賞の時を契機に浮び上ってまいります。

1961年春、私は学生時代所属していました電気系の学会をはなれ、地球電磁気学会に初の参加をしました。地球物理の超高層分野、古地磁気、地磁気成因論、そしてロケット実験に向う宇宙空間物理学の胎動と、かなりユニークな雰囲気魅了されました。理学部の地球電磁気分野の出身者と電波伝播や計算機開発にかかわる工学の出身者が合体したこの学会は、超高層分野から見た時、スपोर्टニクによって皮切られ、米国が必死で追跡する宇宙技術競争を背景に文字どおり宇宙空間物理学の幕あけ時代でした。いまは全て故人となられた永田 武、前田 憲一、加藤愛雄、関戸弥太郎といった諸先生が我国の宇宙空間物理学を興し、国際レベルに少しでも近づけようと覇を競う熱気に満ちた時代でした。

諸先輩の先生方に比して極めて若輩の身でありながら、大変特異な時代に出合ったため、私達は、諸先輩とほとんど同じように、我国の宇宙空間の発達史をそのまま歩かせていただきました。1961年7月に打ち上げられたK-8-7号ロケット実験に参加し、ロケット実験のインパクトに魅せられ、1963年からはインピーダンス・プローブの開発に取り



組み、浮遊容量の影響は根本的に避けられないと言われていた問題を克服する手段を見出しました。宇宙空間プラズマ計測の精度を革命的に変えたといっても過言でない成果に到達するという機会に恵まれました。

1960年代中葉より、さきに述べた先達の方々の努力が稔り、学会には大きな財産が生まれはじめました。全国国立大学共同利用機関として宇宙科学研究所が、そして1970年代に入ると、国立極地研究所が誕生し、地上観測の充実とともに科学衛星による宇宙空間観測が実施されはじめました。それまでもつばら NASA あるいは WDC-A 経由で得られていた宇宙空間観測データが我国の科学者が自らの手で取得し、創意と創造活動の緊張感をもって立ち向う機会が与えられたのです。私は EXOS-B、C および D、三つの衛星の立案、計画、製作、運用、データ解析と全てに参加させていただいて、これらがライフワークとなることを無上の喜びと感謝をもってふり返ります。これには、全国大学共同利用機関で、その設立の理念どおりに働かせてもらったからです。これは、1967年まで京都大学教授で

あった大林辰蔵教授が、若くして宇宙科学研究所教授に就任された事がその一つの理由と想っています。今後も、宇宙科学研究所にはこうした共同利用研究所の理念を実現すべく行動出来る人が強く期待されています。

当学会の国際性は比類のないものです。学問自体そのものが地球全体の研究者達が一丸となって協同観測をするという本質をもっているからで、固体地球物理関係ではDELP計画が成功しました。超高層物理学関係の話に焦点をおかしていただくと、IGY、IASY、IMSが大変な成功を納めました。さらに1980年代に入るとMAP計画を経た後、1990年代には今世紀をしめくくる大プロジェクトと言って過言でないSTEP計画が、学会のかなり大きな部分を舞台に、日本学術会議の研連を切口として成立し、21世紀への跳躍台になりました。このプロジェクトの我国の主査として歩み、学会員の総勢の協力を得つつ、このSTEP計画を成功裡に完了した事も充実感をもってふりかえらせてもらおう事です。

1970年代中葉頃から、私は、かねて私達の学会が21世紀をみすえ将来に向う時、地球のみを対象を閉じる場合、決して正しい選択ではないと思うようになりました。地球とその周辺に育った宇宙空間物理学と地球電磁気学が、有機的に結合しつつ太陽系の科学へと発展することを強く願うようになりました。そこで微力でしたが、重点領域「原始太陽系と惑星の起源」の代表者を引き受け、そして惑星探査への努力をいたしました。このことが今回の受賞の理由にもかかわらずいただいていますのは、単に私自身への労いだけでなく、ともすると専門の分野へ細分化してゆく地球物理学が、惑星を焦点として有機的に結合成長する方向へ進む道として歩みを続けて行く価値を、当学会が認めていて下さるものと思ひ、ひとしお、喜びに感ずるところです。

最後に私の学会を通しての生涯の活動を支援して下さい、全ての会員の方々に心から感謝を申し上げます、受賞の挨拶とさせていただきます。

分科会報告

●CA 研究会

平成12年1月31日と2月1日の2日間、東京大学地震研究所において「地球電磁気学的イメージングから地殻内の流体相について何がわかるか」と題する研究集会を行なった。出席者はのべ約80名であった。表題のテーマについての、口頭19件ポスター16件の発表をもとに活発な議論が行なわれた。また、今回は20世紀最後の研究会にあたることから、21世紀に向けて今後10年に行なうべき重要研究テーマについて、若手の研究者による話題提供と総合討論を行なった。研究会の成果は、例年通り「CA研究会2000年論文集」という印刷物にまとめると共に、地震研究所彙報の特集号にも掲載された。

(歌田 久司)

●グローバル地磁気観測研究会

(1) 電磁気研連のもとに地磁気作業委員会(委員

長:河野 長、幹事:湯元清文)を設置し、日本の大学・官庁等による地磁気観測を今後も継続・発展させ、また国際的な地磁気観測にも貢献できる体制を創っていくための会議とまとめ作業を行っている。(開催日;・H11年6月11日、1999年合同学会期間中、・H11年11月11日、SGEPPS秋の仙台大会期間中、・H12年6月28日、2000年合同学会期間中)

(2) 名古屋大学STE研の海外観測専門員会、STE研究連絡会と連携した新しい「21世紀におけるSTP観測ネットワーク」の研究集会を下記の日程と趣旨で実施した。

日 程:2月28(月)~3月1日(水)

場 所:九州大学理学部大会議室(福岡市東区箱崎6-10-1)

世話人:湯元清文(九州大)、西野正徳(名大STE研)、渡邊 堯(茨城大)、菊池 崇(通総研)
会合の主旨:

太陽から地上までの複合系で発生するSTP現象を、時間的・空間的に変化するものとして捉え、現

象の全体像を把握することを目的とする「ネットワーク観測」を推進するため、太陽地球環境研究所の設立時において「海外観測専門委員会」が設置され、太陽から地球までをカバーする研究分野を横断する研究組織という位置づけのもとに、活動が行われてきました。しかし、各分野独自の研究の進展にともなって、「海外観測」の意味合いが次第に変化し、現状ではグローバルな「電磁気圏」の研究分野の観測活動に限定して考える傾向が見られます。このような状況からさらに飛躍するためには、ネットワーク観測の持つ本来の意味に立ち戻り、「海外観測」だけでなく、広く「国内観測」をも包括したネットワーク観測を推進し、それによって得られたデータに立脚した研究活動を基本とする、全国的な研究組織を新たに設立する必要があると思われま。そこで、各研究分野を横断するグループ活動に発展させる方向で、新しく「STP観測ネットワーク研究会」をスタートさせる事が、STE研究連絡会や太陽地球環境研究所海外専門委員会の幹事会、並びに関係者の間で合意されました。この主旨に沿って、これまでのネットワーク観測で得られた研究成果の報告や、今後の研究計画の提言を行って頂き、21世紀を見据えたSTP観測ネットワークへの道筋について議論を深めるため、九州大学大学院理学研究科に於いて、上記の研究会を開催したいと思います。来世紀の太陽地球科学研究を担う若い世代の研究者を含め、多数の方々の御参加を期待しております。

(湯元 清文)

●プラズマ粒子シミュレーション研究会

白井 英之 岡田 雅樹 上田 裕子
「プラズマ粒子シミュレーション (PPS) 研究会」は、今後益々盛んに用いられる粒子シミュレーションの標準版コード作成を目指し、学会の枠を超えた研究者間の情報交換・議論の場として発足し、1998年12月に京都大学宇宙電波科学研究センター、SGEPPS会員のご参加にたいして本会がお役に立てればと、また、多くの方々のご助言をいただきながら分科会活動として定着させていければと思っております。以上、ご報告とさせていただきます。

●アラスカロケット実験研究会

岡田敏美、遠山文雄
SGEPPS会員をはじめ多くの方々のご賛同を得て発足した「アラスカロケット実験研究会」は、

着実にその目的に向かって活動を開始しました。ここにご理解とご支援をいただきました皆様にお礼を申し上げます。

これまでの活動経過における特記事項としては、2000年1月に打ち上げた小型ロケットTR-1号実験があります。このロケットには、東海大学の学生が手作りした磁力計が搭載され、ロケットの姿勢計として寄与しました。また、現在、進行中の計画として、富山県立大学の電磁波工学研究室が中心となって提案した「70 km以下の電離層観測計画」があります。この計画は、金沢大学の長野研究室との協力により学生の手作りによって実現しようとするものです。上記ロケット実験について、これまでのアラスカ大学とNASAとの協議により2002年の春に打ち上げウィンドウが得られる見込みであり、その実現を目指しています。さらに、東海大学は高感度磁力計のほかに、アラスカ大学から開発搭載を要請されているロケットモーター部とペイロードの切り離し機構を製作し搭載することも計画しています。

さらには、富山県立大学の宇宙技術工房(サークル)は、小型ロケットから高度50 kmあたりから放出されるバルーンを利用して宇宙微小物体(エアロゾル、微生物など)のサンプルリターン技術を開発しています。本提案については、昨年12月にアラスカ大学を訪問した学生がUAF学生ロケット実験研究会において討議を行いました。

以上のように、本研究会を通してアラスカ大学とは友好関係が生まれつつあります。アラスカロケット実験にたいする様々な提案は歓迎されています。SGEPPS会員のご参加にたいして本会がお役に立てればと、また、多くの方々のご助言をいただきながら分科会活動として定着させていければと思っております。以上、ご報告とさせていただきます。

●宇宙天気研究会

(1) 通信総合研究所、名古屋大学STE研、科学技術庁で企画・共同主催した国際ワークショップ「第23太陽活動極大期における宇宙天気研究とオペレーション」(1999年11月15-17日、茨城県大洗町)にISES(国際宇宙環境サービス機関)とともに、共催団体として加わった。このワークショップで生まれたワーキンググループは、現在ISESのワーキンググループとして活動を継続している。今後、SGEPPS分科会の話題として取り上げられることになろう。

(2) SGEPPS分科会 宇宙天気研究会の会合は、ま

だ開くに至っていない。

(丸橋 克英)

●宇宙飛翔体環境研究会

佐々木 進 白井 英之 岡田 雅樹
「宇宙飛翔体環境研究会」は、実験や数値シミュレーション手法を用いてSGEPSS内で行われている宇宙飛翔体環境に関する議論を継続的に積み上げ、材料物性工学、推進工学、電気電子工学、宇宙プラズマ物理学などの様々な分野の研究者との交流を通して宇宙飛翔体近傍環境の理解をより一層深めることを目的に発足し、昨年度12月に第1回目の研究会を国立極地研究所で行った。参加者としては、SGEPSSの関連研究者に加え、NASDAの飛翔体帯電関連、各大学や宇宙研の宇宙推進器関連の方々など多彩なメンバーが集まり、宇宙研の佐々木によるレビュー講演の後、それぞれの研究紹介、今後の方針などについて議論を行った。第2回目は本年度後半を予定している。

●波動分科会報告

分科会としての活動は、6月26日に発起人有志が集まり、今後の方針を議論した。

(1) 発起人会

その他、関連活動としては以下のとおり。

(2) SELENE低周波波動班班会

(3) 次期磁気圏ミッション検討会

(4) 木星研究会

詳細報告

(1) 発起人会 6月26日

発起人のうち9名が集まり、今後の方針などについて議論した。分科会の趣旨については別メールのように小幅な修正をして了承された。基本方針としては、30から60分のじっくり聞ける会合とすること、あらかじめPDFで予稿を作りWebに掲載するとともに、SGEPSSメーリングリストで周知すること、旅費の手当てを考慮すること、メーリングリストを作ること、分科会は国内外の会議等の関係でつぎの学会までには日が取れず、1月のRASCで行う方向とした。代表幹事に橋本、幹事に森岡、長野両先生を決定した。(出席者 森岡、笠羽、筒井、橋本、小嶋、笠原、今井、羽田、中村)

(2) SELENE低周波波動班班会

11月27日にSELENE低周波波動観測装置を中心に、設計仕様や、データ処理などについて議論し

た。具体的には1MHzまでのスペクトル観測、100kHzまでの波形観測をそれぞれ2チャンネル行う仕様の詳細、LHR波動などを受信するためには、どの程度低い周波数まで観測すべきか、ESWの伝播速度などを測定するためのモノポール観測を如何にすべきかなど、GEOTAILでの経験も踏まえて検討した。

(3) 次期磁気圏ミッション検討会 (注:この会合は前回の学会前の9月29日に開催された。)

Geotail衛星において、波動観測の時間分解能が向上したことにより、ESWの発見など新たな展開があった。そして、数msecという電子のダイナミクスに支配される時間スケールでの観測の重要性が明らかになった。次期磁気圏ミッションでは、Geotail衛星では望めなかった高時間分解能での粒子観測と波動の波形観測の共同観測体制をぜひ充実させた。

一方、波動としては、空間の波動エネルギー分布などを電子の慣性長程度の分解能で観測し、波数の同定、粒子-波動エネルギー変換効率の空間分布などを調べるため、複数の衛星による同時観測が必要である。

(4) 木星研究会

3月16、17日に東北大学で木星研究会が開催され、木星電波や木星オーロラ、イオをはじめ木星に関する電波観測やイメージング、その他地球を含む関連する最新の研究成果や観測計画の発表、将来計画に関する議論などが行われた。

(橋本 弘蔵)



第108回総会並びに講演会開催のお知らせ

第108回地球電磁気・地球惑星圏学会総会と講演会は、国立極地研究所の担当により、板橋区の後援を得て、下記の通り開催されます。

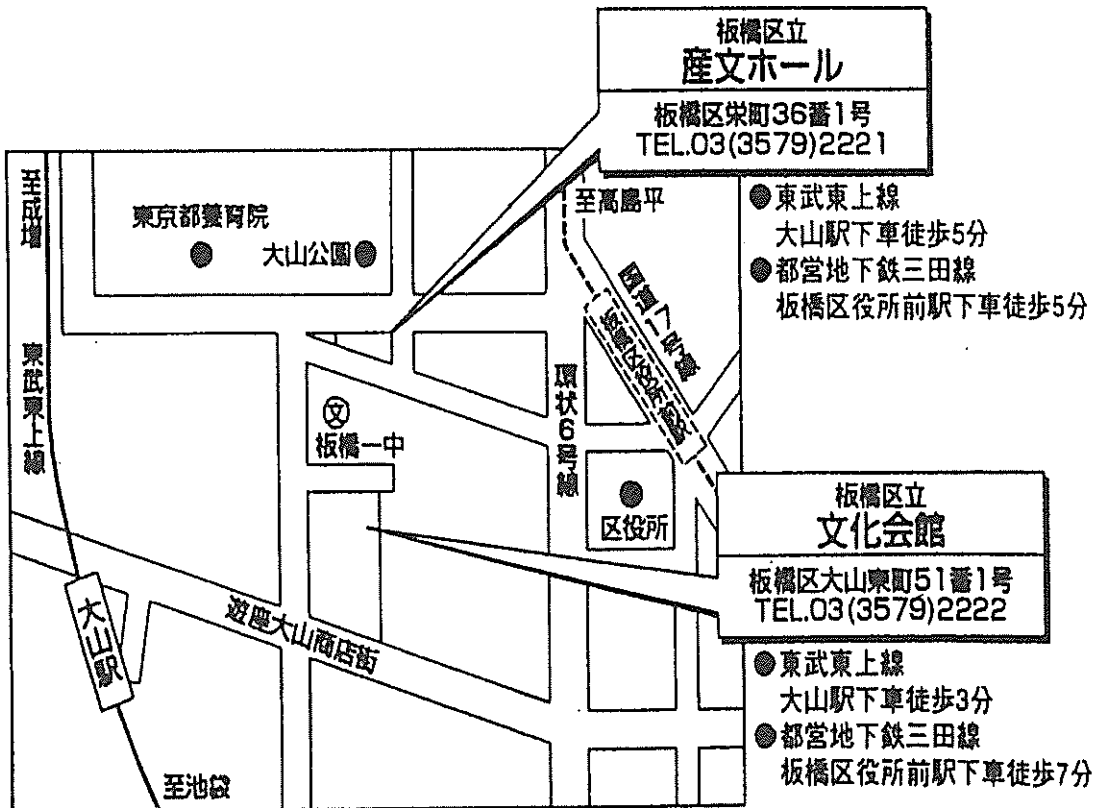
期間：2000年11月20日（月）－23日（木）
 会場：板橋区立文化会館および同産文ホール
 文化会館
 東京都板橋区大山東町51-1
 TEL：03-3579-2222
 産文ホール
 東京都板橋区栄町36-1
 TEL：03-3579-2221

会場案内(地図参照)

板橋区立文化会館
 東武東上線大山駅下車徒歩3分
 都営地下鉄三田線板橋区役所前下車徒歩7分
 板橋区立産文ホール
 東武東上線大山駅下車徒歩5分
 都営地下鉄三田線板橋区役所前下車徒歩5分

なお、車での来場はご遠慮ください。

問い合わせ先：国立極地研究所 麻生武彦
 TEL：03-3962-4756 FAX：03-3962-5701
 E-mail：aso@nipr.ac.jp



講演申し込みについて

【講演申込および予稿原稿送り先】

★地球内部および月・固体惑星関係

〒869-1404 熊本県阿蘇郡長陽村

京都大学火山研究センター 田中良和 宛

★超高層（太陽・惑星間空間、地球・惑星電磁気圏
および地球・惑星大気）関係

〒442-8507 愛知県豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学太陽地球環境研究所
品川裕之 宛

【投稿の方法（郵送）】

○次ページの講演申込用紙をコピーしたものに必要事項を記入して、予稿原稿、学術情報センターへの登録用データ原稿、テキスト形式のファイルのコピーされたフロッピーディスクとともに送ってください。

○申込用紙、予稿原稿、学術情報センターへの登録用データ原稿ともにコピーを同封して下さい。コピーを同封していないものは受け付けません。

○(a) 講演申込用紙の氏名、所属はプログラム編集・印刷の都合上、日本語表記が可能な場合は必ず日本語でお願い致します。

(b) 講演題目は、予稿と同じ言語でお願いします。

(c) 外国人の氏名はアルファベット表記でも差し支えありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。

(d) 日本人著者名の場合は、漢字とアルファベットの両方の欄に記入されていること。

(e) 英語講演題目は、文頭、固有名詞、略号以外は小文字とすること。

○予稿原稿のフォーマットに注意願います。特に左上の10mm×35mmのスペースは予稿集の印刷時に講演番号を付けるためのものですので、この部分にはタイトル等が入らないようにして下さい。

○講演申込みは筆頭著者一名につき、口頭発表一件、ポスター発表一件まで受付けます。（但し、プログラム編成の都合上、実際の発表が希望通りにはならない事がありますので予めご了承下さい。）又、非会員のみによる発表は受けられません。

○講演・ポスター発表の際にビデオ（VHS）、パソコンもしくは映写機（8mm）を使われる方は、その旨、プログラム申込用紙にご記入下さい。

○今回も昨年の大会と同様、「学術情報センターへの登録用データ原稿」も予稿とあわせて郵送していただきます。原稿見本をご覧の上、作成してA4用紙に印刷したオリジナル原稿とそのコピーをお送りください。原稿はA4 1頁に収めてください。収まらない場合には2頁をホッチキスで綴じてください。またテキスト形式のファイルをフロッピーディスクに“著者名.gak”という名前でごコピー

し、印刷原稿に同封してください。

○学術センターへの登録原稿は、原稿見本にありますように次のように作成ください。

各項目の先頭にはA1:、……、T1:の記号を書き込んでください。

A1: 日本語タイトル（英語タイトルの場合には無くてよい）

B1: 英語タイトル（太文字は基本的に、タイトル先頭のみ）

C1: 使用言語（講演に際し使用する言語。日本語または英語）

E-G: 著者（E. 漢字、F. カタカナ、G. ローマ字）
姓名の間は/で区切る。ローマ字名も姓名の順。
著者順に従い、E1-L1、E2-L2、E3-L3と番号をふる。外国人の場合は、E*は不要、またグループの場合はJ-Lも省略可。

J-L: 所属機関（J. 漢字、K. カタカナ、L. 英文）
学術情報センターの規約により、所属機関は論文発表時のものとし、元、現などはつけなくて下さい。また機関名は省略しないで下さい。東工大ではなく東京工業大学。ただし株式会社や財団法人などは入れない。株式会社日立製作所ではなく日立製作所。NHKなど略称が広く知られている場合は略称でも可。

M: 日本語キーワードを6個以内で記入。

N: 英語キーワードを6個以内で記入。

T1: 英文抄録を100語前後で記入。英文抄録は、予稿本文の内容を整理する形で書いて下さい。日本語抄録は必要ありません。

【電子メール・WWWによる投稿の方法】

○郵送による方法に加え、WWWを利用した投稿の受付を行います。但し、WWW投稿による予稿集には図の添付ができませんので、予稿集に図を載せたい方は従来通りの郵送による申込み方法をご利用下さい。WWWを利用なさる方へはオンラインの予稿集から各自のホームページにある図へリンクを張るサービスを希望により行います。

○WWWを利用した投稿方法等についての詳しい情報はURL <http://gakkai.stp.isas.ac.jp/sgepss/>を参照して下さい。（8月中旬頃よりサービス開始予定。）

【締め切り】

○予稿原稿の申込み締め切りは、郵送による場合には9月8日（金）、WWW利用の場合には9月9日（土）午前0時と致します。FAX、電話等による遅延の依頼は一切受付られません。

○総会議題の申込は、9月11日（月）迄に会長宛書面でお願います。

講演申し込み用紙 (コピーしてお使いください)

1. 題目 (予稿原稿と同じ言語にて記入) :

2. 氏名 (所属) (日本語にて記入、連名の場合スピーカーには○を付ける) :

連絡先氏名: _____

Tel: _____ Fax: _____ e-mail: _____

3. 投稿区分 (○をして下さい。複数選択可、最低1つは必須)

- A 地球内部: 1. 主磁場ダイナモ 2. 電気伝導度 3. 地殻活動電磁気学 4. 磁気異常
5. 岩石磁気・古地磁気 6. 磁場計測 7. その他 ()
- B 固体惑星: 1. 太陽系 2. 月・隕石 3. 比較惑星 4. その他 ()
- C 超 高 層: 1. 対流圏/成層圏 2. 中間圏/熱圏 3. 電離圏 4. 電磁圏 5. 磁気圏
6. 太陽圏 7. 惑星圏 8. オーロラ 9. ストーム/サブストーム
10. プラズマ波動 11. その他 ()

4. 発表形式: 1. 口頭 2. ポスター 3. どちらでも可

(必ずしもご希望に添えないことがあります)

5. 映像装置: ビデオプロジェクタ

1. VHS 2. PC

6. 発表順位: 以下の講演の(前/後)を希望します。

著者: _____

題目: _____

7. 予稿原稿は次ページのフォーマットに従って、A4用紙にできるだけワープロで清書して下さい。

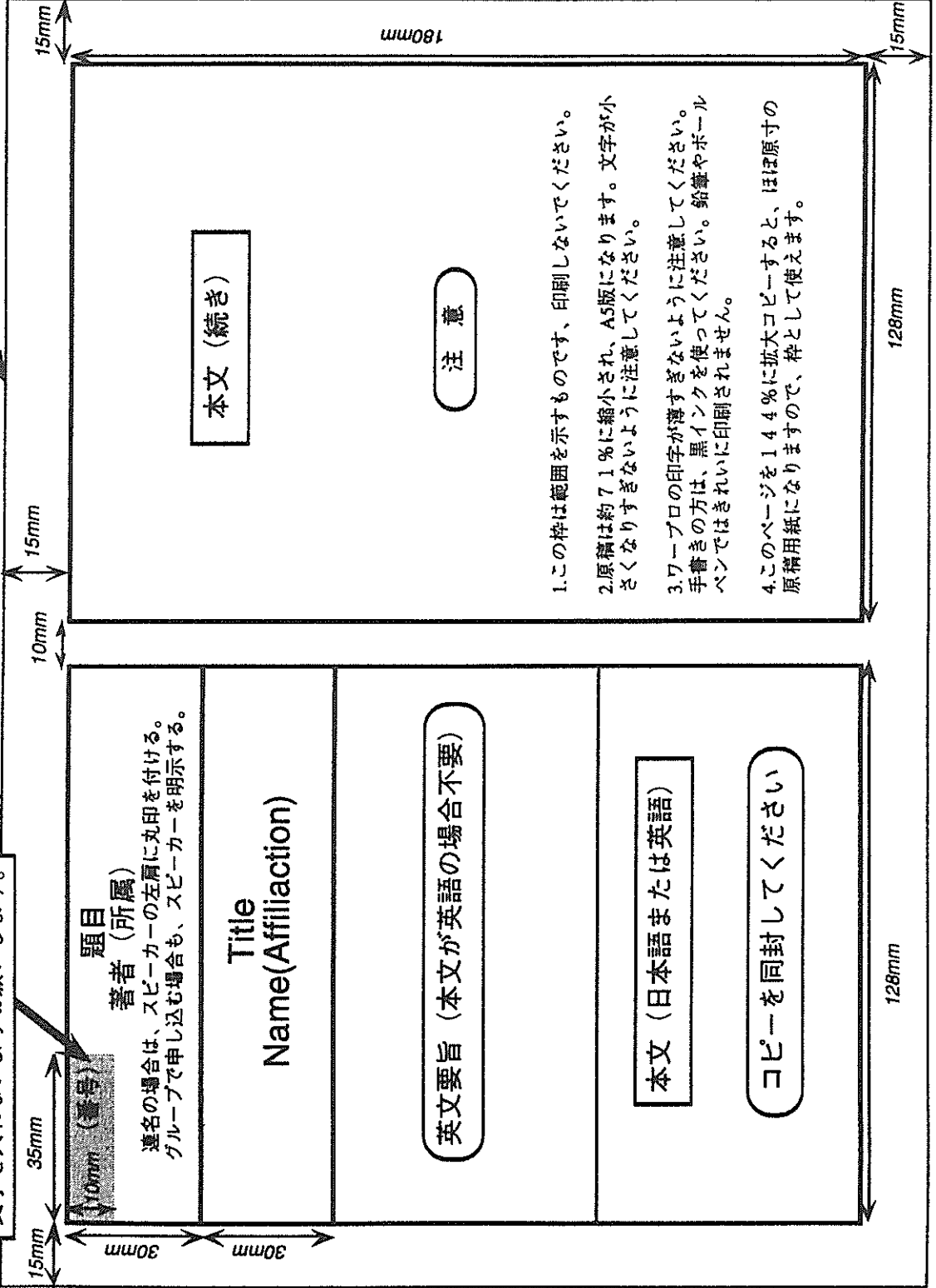
8. 予稿原稿のコピーを必ず1枚同封してください。

9. その他ご希望、ご意見などがありましたら以下にお願いいたします。

予稿原稿フォーマット

A4用紙の外枠

この欄には講演番号が入ります。
文字を入れたいようお願いします。



学術情報センターへの登録用データ原稿見本

A4用紙1頁に収めてください。収まらない場合には2頁をホッチキスで綴じてください。

A1: 磁気圏境界におけるプラズマ波動の特性
B2: Plasma wave features at magnetospheric boundaries
C1: 日本語

E1: 松本/紘
F1: マツモト/ヒロシ
G1: Matsumoto/Hiroshi
J1: 京都大学宙空電波科学研究センター
K1: キョウトダイガクチュウクウデンバカガクケンキュウセンター
L1: Radio Atmospheric Science Center, Kyoto University
E2: 中尾/健司
F2: ナカオ/ケンジ
G2: Nakao/Kenji
J2: 京都大学宙空電波科学研究センター
K2: キョウトダイガクチュウクウデンバカガクケンキュウセンター
L2: Radio Atmospheric Science Center, Kyoto University
E3: 小嶋/浩嗣
F3: コジマ/ヒロツグ
G3: Kojima/Hirotsugu
J3: 京都大学宙空電波科学研究センター
K3: キョウトダイガクチュウクウデンバカガクケンキュウセンター
L3: Radio Atmospheric Science Center, Kyoto University
M: ジオテイル, プラズマ波動, 磁気圏境界, パウショック
N: GEOTAIL, plasma waves, magnetosphere, boundaries, Bowshock

T1: Characteristic wave features of plasma and radio waves in the vicinity of magnetospheric boundaries such as Bow Shock, Magnetopause and Plasmapause are examined based on GEOTAIL PWI data for three years from 1994 to 1997. GEOTAIL traverses these boundaries regularly and quasi-periodically and provide a unique set of wave data which enables us to study plasma wave nature at these boundaries and various plasma area nearby. We will discuss the wave nature based on both single event study and statistical analysis.

各項目の先頭にはA1:, ..., T1:の記号を書き込んでください。罫線枠は不要です。

A1:日本語タイトル (英語タイトルのみ場合は無くてもよい)

B1:英語タイトル (太文字は基本的に、タイトル先頭のみ)

C1:使用言語 (講演に際し使用する言語。日本語または英語)

E-G:著者 (E.漢字, F.カタカナ, G.ローマ字)

姓の間は/で区切る。ローマ字名も姓名の順。

著者順に従い、E1-L1, E2-L2, E3-L3と番号をふる。

外国人の場合は、E*は不要、またグループの場合はJ-Lも省略可。

J-L:所属機関 (J.漢字, K.カタカナ, L.英文)

学術情報センターの規約により、所属機関は論文発表時のものとし、元、現などはつけないで下さい。

また機関名は省略しないで下さい。東工大ではなく東京工業大学。ただし株式会社や財団法人などは入

れない。株式会社日立製作所ではなく日立製作所。NHKなど略称が広く知られている場合は略称でも可。

M:日本語キーワードを6個以内で記入。

N:英語キーワードを6個以内で記入。

T1: 英文抄録を100語前後で記入。

英文抄録は、予稿本文の内容を整理する形で書いて下さい。日本語抄録は必要ありません。

郵送の場合、テキストファイルのフロッピーの用意もお忘れなく。

田中館賞の推薦について

今年度の田中館賞の推薦締め切りは、
平成12年9月30日（土）
です。

候補者の推薦には、

- ・推薦状
- ・業績（論文）リストと別刷り
- ・略歴書

各11部を期日までに会長宛てにお送りください。
（大村 善治運営委員）

- (5) 学位取得年
- (6) 審査対象論文名(3編以内、コピー各1部添付)
- (7) 審査対象論文に対する評価(それぞれの論文について400字以内)
- (8) 候補者の研究が学会、研究分野に果たす貢献、及び候補者の研究の将来性(400字以内)

5. 推薦書送付先

〒611-0011 宇治市五ヶ庄
京都大学 防災研究所
大志万 直人

e-mail
g53032@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

もしくは、

osman@rcep.dpri.kyoto-u.ac.jp

TEL : 0774-38-4202 (直通)

FAX : 0774-38-4190

6. 大林奨励賞推薦作業委員会委員名簿

大志万 直人（委員長）

g53032@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp

岡野 章一 okano@pparc.geophys.tohoku.ac.jp

荻野 竜樹 ogino@stelab.nagoya-u.ac.jp

西田泰典 nishida@ares.sci.hokudai.ac.jp

向井 利典 mukai@stp.isas.ac.jp

横山 由紀子 yokoyama@tono.jnc.go.jp

（大志万 直人）

平成12年度大林奨励賞の

候補者推薦のお願い

大林奨励賞候補者推薦作業委員会
平成12年度大林奨励賞につきまして、下記により
会員からの候補者推薦をお願いいたします。

記

1. 候補者の対象 下記の大林奨励賞内規第1条に
該当する本学会若手会員（原則として平成12年4月1
日現在で35才以下とする）

「大林奨励賞内規第1条

本学会に大林奨励賞を設け、以下(1)(2)項に相
当する会員を表彰し、その研究を奨励する。

(1) 本学会若手会員の中、地球電磁気学、超高
層物理学、及び地球惑星圏科学において、独創的な
成果を出し、さらに将来における発展が充分期待で
きる研究を推進している者。

(2) この場合、若手会員とは当該年度初めに、
原則として35才以下の会員をいう。」

2. 推薦者 本学会会員(及び大林奨励賞候
補者推薦作業委員会委員)

3. 推薦締め切り日 平成13年1月26日(金)必着

4. 推薦手続き 以下の(1)から(8)の項目を記載
した推薦書を1部送付(郵送)してください。

- (1) 推薦者氏名(自署・印)
- (2) 候補者氏名、生年月日
- (3) 候補者所属機関・部局・職
- (4) 学位論文名

人事公募

● 京都大学宙空電波科学研究センター

1. 職名・人員： 教授 1名
2. 所属： 地球電波科学研究部門
3. 研究分野： グローバル大気情報解析分野
4. 専門分野等： 衛星および地上ネットワークによる観測に関する研究およびグローバルな大気特性の解析に関する研究。

地球電波科学研究部門では、大気圏光電波計測
分野、グローバル大気情報解析分野および大気環
境科学分野(外国人客員)が協力して、地表から
中層大気・超高層大気に至る大気圏に生起する
様々な現象の特性を、電波・光学計測技術を用い
て地上から複合観測するとともに、衛星観測デー
タおよび数値モデルも用いて研究しています。ま
た、M U レーダーを始めとする観測装置とデータ
ベースの全国共同利用、ならびに関連する研究課
題の国際共同研究を推進しています。

グローバル大気情報解析分野では、大気圏の衛星

および地上ネットワーク観測に関する研究分野を
発展させるとともに、これらにより収集される
データを用いてグローバルな大気特性の解明と定
量的解釈に関する研究を推進します。今回は当該
分野の研究を指導できる実績及び能力を有する中
心的研究者を公募します。

なお、当該研究部門の関連する国内および国際的
な共同研究の推進、ならびに全国共同利用研究セ
ンターの運営に責任をもって当たられる方を希望
します。

5. 必要書類

- (1) 履歴書 (学歴、学位、研究歴、職歴等)
- (2) 研究業績リスト (主要業績は別刷り各1部を添付)
- (3) これまでの研究概要 (2,000字程度)
- (4) 当該研究分野での研究計画と抱負 (2,000字程度)
- (5) 応募者について意見を聞ける2名程度の方の氏名と連絡先。なお推薦者がある場合は推薦書を添付して下さい。

6. 応募締切: 平成12年9月29日 (金) 必着

7. 応募書類提出先

〒611-0011 宇治市五ヶ庄

京都大学宙空電波科学研究センター

センター長 深尾昌一郎

電話 0774-38-3806 FAX 0774-31-8463

電子メール fukao@kurasc.kyoto-u.ac.jp

ホームページ:

<http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp>

※封筒の表に「地球電波科学研究部門・グローバル大気情報解析分野教官応募書類」と朱書き、郵送の場合には簡易書留にして下さい。

8. 着任時期: できるだけ早い時期

9. 問い合わせ先

地球電波科学研究部門 教授 津田 敏隆

電話: 0774-38-3804 FAX: 0774-31-8463

電子メール: tsuda@kurasc.kyoto-u.ac.jp

●京都大学大学院理学研究科附属地磁気世界資料解析センター

当センターでは、助手1名を公募しております。詳しくは、当センターのホームページ

<http://swdcdh.kugi.kyoto-u.ac.jp/kouhou.html>
をご覧下さい。

センター長 家森 俊彦

TEL: 075-753-3949 FAX: 075-722-7884

e-mail: iyemori@kugi.kyoto-u.ac.jp

●千葉大学自然科学研究科多様性科学専攻地域多様性科学講座

本講座では以下のような教員公募を行うことになりました。本公募の教員は本講座での教育・研究ばかりでなく、兼務教員として理学部地球科学科の教育・研究とも深く関係することを申し添えます。

1. 担当分野: 千葉大学自然科学研究科 多様性科学専攻 地域多様性科学講座 地球多様性科学教育研究分野

2. 職種: 助教授

3. 研究分野: 海洋底地球科学

特に地球物理学的 (地球電磁気、熱、重力などの) 手法を用いて海洋底科学の教育・研究を目指す方、さらに関連分野の教員と協力して教育・研究を進める方を望みます。

4. 応募資格: 博士の学位を持つ45歳位までの方

5. 着任時期: 決定後なるべく早い時期

6. 応募書類:

a) 履歴書

b) 研究業績調査 (査読を受けた原著論文とそうでない論文とに分けてください。)

c) 主要な論文5-6編の別刷り、あるいはそのコピー

d) 推薦状、あるいは意見を聞ける方2-3名以内の氏名、勤務先、連絡方法

e) これまでの教育・研究実績と千葉大学赴任後の教育・研究への計画・抱負をなるべく詳しくA4用紙3枚程度に記述してください。

7. 応募締め切り: 平成12年9月8日 (金) 必着

8. 書類送付先: 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町

1-33 千葉大学自然科学研究科庶務掛宛

封筒表に「地球多様性科学応募書類」と朱書きして、必ず書留郵便にて送ってください。

9. 問い合わせ先: 〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学理学部地球科学科

伊勢崎 修弘 電話: 043-290-2848

佐藤 利典 電話: 043-290-2849

FAX: 043-290-2859

10. 教員構成:

地球多様性科学教育研究分野

教授 (兼担) 高村 民雄、西尾 文彦 (環境リモートセンシング研究センター)

助教授 (兼担) 金川 久一 (理学部地球科学科)

助教授 (専任) 本公募

理学部地球科学科: 地球進化学講座 教授 西田 孝、井上 厚行、*山口 寿之、助教授 小竹 信宏、津久井 雅志 助手 高橋 奈津子、古川 登、*亀尾 浩司、地球イノベーション講座 教授 伊勢崎 修弘、伊藤 谷生、廣井 美邦、助教授 佐藤

利典、金川 久一、@（本公募の兼務位置）、
助手 加藤 紀子、地球環境科学講座 教授 佐倉
保夫、水谷 武、大原 隆、伊藤 慎、@古谷 尊
彦、 助教授 宮内 崇裕、@唐 常源、 助手

松本 みどり、@刈谷 愛彦（*及び@はそれぞ
れ海洋バイオシステム研究センター、自然科学研究
科の専任教員で、理学部地球科学科の兼務教員を表
す。）

研究助成・賞案内

●第17回（平成12年度）井上學術賞（井上科学振興財団）

対象： 自然科学の基礎的研究で顕著な業績をあげた研究者。ただし、年齢が平成12年9月20日現在で50歳未満の者に限る。

賞： 本賞は賞状及び金メダル 副賞は200万円 受賞件数は5件以内

推薦件数： 本学会より1件

提出方法： 所定の推薦用紙に必要事項を記載し、財団あてに提出。

締切期日： 平成12年9月20日（水）必着（総務切は8月31日）

●第41回（平成12年度）東レ科学技術賞（東レ科学振興会）

対象： 学術上重要な発見、発明をし、その効果が大きい者。重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献した者。

賞： 賞状、金メダルおよび賞金500万円（2件前後の予定）

推薦件数： 本学会より2件以内

提出方法： 所定の推薦用紙に必要事項を記載し、財団あてに提出。

締切期日： 平成12年10月10日（火）必着（総務切は9月11日）

●第41回（平成12年度）東レ科学技術研究助成

対象： 独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者。

助成金： 総額1億3千万円、一件3千万円程度まで10件程度。

推薦件数： 本学会より2件以内

提出方法： 所定の推薦用紙に必要事項を記載し、財団あてに提出。

締切期日： 平成12年10月10日（火）必着（総務切は9月11日）

その他

●"Advances in Polar Upper Atmosphere Research"への投稿受け付け

国立極地研究所では本研究所の英文ジャーナル "Advances in Polar Upper Atmosphere Research" Vol. 15 への投稿を下記の要領で受け付けています。本ジャーナルは、従来のProceedings of the NIPR Symposium on Upper Atmosphere Physicsの発展として、ひろく、極域超高層物理学分野全般に亘る論文・研究ノート・レビュー・レポートを投稿頂き、当該分野研究発展の里程標とする年刊のレフリードジャーナルです。

会員各位の積極的な投稿を歓迎いたします。

原稿締切:平成12年12月1日(金)

発行予定:平成13年7月

投稿規程の概要

投稿種別は研究論文、研究ノート、レビュー、レポートです。範疇を明記のうえ、原稿1部とコピー2部を下記宛送付下さい。原稿の採否等は編集委員会で決定します。

投稿細則等についての問い合わせおよび論文送付先 〒173-8515 東京都板橋区加賀1-9-10

国立極地研究所

麻生 武彦 Tel:03-3962-4756 Fax:3962-5701

高濱 信子(補佐) Tel:03-3962-4646 Fax:3962-5742

e-mail: editor@uap.nipr.ac.jp

SGEPSS Calendar

[2000年]

- 8月2日～3日： 第24回極域における電離圏磁気圏総合観測シンポジウム 国立極地研究所、東京
8月14日： 第18期学術会議研究連絡委員会の委員候補者選挙投票〆切
9月19日～21日： International Workshop on Seismo Electromagnetics: IWSE2000 電通大、東京
10月2日～6日： The First S-RAMP Conference 札幌
10月9日～12日： 第2回大気・環境・宇宙リモートセンシングに関するSPIE国際アジア太平洋
シンポジウム 仙台国際センター
10月15日～17日： 第44回宇宙科学技術連合講演会 アクロス福岡
11月20日～23日： 第108回地球電磁気・地球惑星圏学会総会・講演会 板橋文化会館, 産文ホール, 東京
12月15日～19日： AGU Fall Meeting San Francisco Calif., U.S.A.

[2001年]

- 1月24日～26日： プラズマ科学シンポジウム2001/第18回プラズマプロセッシング研究会 京都テルサ
7月17日～22日： 第25回電離気体現象国際会議 名古屋国際会議場
7月23日～27日： International EISCAT Workshop 国立極地研究所、東京
8月2日～4日： AP-RASC'01 2001年アジア太平洋電波科学会議 中央大学、東京
8月18日～30日： IAGA-IASPEI Joint Scientific Assembly Hanoi, Vietnam

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 松本 紘

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学宙空電波科学研究センター

TEL:0774-38-3805

FAX:0774-31-8463

e-mail: matsumot@kurasc.kyoto-u.ac.jp

総務 大村 善治

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄 京都大学宙空電波科学研究センター

TEL:0774-38-3811

FAX:0774-31-8463

e-mail: omura@kurasc.kyoto-u.ac.jp

庶務 麻生武彦 (会報担当)

〒173-8515 東京都板橋区加賀1-9-10 国立極地研究所 北極圏環境研究センター

TEL:03-3962-4756

FAX:03-3962-5701

e-mail: aso@nipr.ac.jp

運営委員会 〒113東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センターC21 (財)日本学会事務センター気付

03-5814-5810 会員業務 (入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務 (庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込みは運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。
会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。